

日文研究室だより

二〇〇四年度

会長 彦坂佳宣

新緑を迎える度に新年度のあらたな気持ちを感じます。——と言っておいてこんなセリリも無いものですが、これで私の日本文学会の会長と専攻主任の任期が終わることを正直ほっとした気持ちで迎えています。

会長は専攻主任がつとめるのですが、まずこの主任という仕事、聞こえは良いものの要するにやや責任ある雑役係です。二〇〇三年度は文学部の学科制が「人文学部」に改組されて再出発した年です。この準備は数年前から進行し、日文専攻でも前主任であった真下先生を中心に進められてきました。主として従来の夜間主の科目を再編成し、テキスト中心であった内容を文化・社会また民族・映像などに関連するやや幅の広いものとし、社会的な現実にあわせようとしたものです。昼間主と夜間主の区別も廃止され、学生は時間的にも内容的にもかなり自由な科目履修ができることになりました。

しかし、一方で、履修が自由なた

めに好きな科目に偏って広い学習をおろそかにする傾向も出てきて、最近では履修を古典・近代・語学にわたるような指導もしています。

——という大変革に対応するさまざまな事務的な処理、そして目まぐるしい大学間の競争や立命館大学また学部内の多様な問題、はては臨時の仕事の役割あてまで主任がするのです。

また、本当に沢山の学生とも面接しました。退学や奨学金取得に関する面接が多かったのも近年の特色でしょう。学生生活に溶け込めないで辞めていった学生もいましたし、6回生など「早く卒業すれば……」と言いたい学生もいました、いえ言いました。

そうした中で会長の仕事は、実は大会での挨拶、また「論究・日本文学」の編集の他には余り大した仕事はありませんが、この「論究」の原稿集めが問題でした。論究は、院生の発表の場とすること、専任教員の一人は責任をもって論を載せること、卒業生などの研究者の投稿などから成っていますが、なかなか黙っていて原稿が集まる状況にはありません。定期的に行われている談話会

でよい発表を見つけ、あるいは国語教育ゼミナールでの発表に投稿を呼びかけたり、卒業生に投稿を誘ったりと様々です。そして、この活動と原稿の勧誘とに時間的なロスもあって、有機的に機能しなかったことも問題です。

「論究」を年二回の刊行にされたのは退職された福田教授の時であったと思いますが、財政的に困難な状況を克服されて、現在では刊行がかなり順調に続けられています。これには人文学会からの相当な補助もあるのですが、まずは健全な状況だと思えます。こうした場が提供されているのですから、院生や卒業生の積極的な投稿をお願いしたく思います。またそうした機会を自分の研究に生かしてほしいと思います。

次は学会創立50周年の行事を予定しています。会員の皆さまには、この学会を守り立て、またご自身の研究活動に生かしてほしいと思います。なお、〇三年度末で伴利昭先生がご退職となりました。伴先生には長らく専攻の教学にご尽力いただきました。その後任には中西健治先生が来られました。